様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２４１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１０９８０

研究課題名（和文）心理的成長の構造と生起予測性を搭載した小児がん経験者のPTG尺度の開発

研究課題名（英文）Development of a posttraumatic growth scale equipped with the psychological growth structure and predictability of occurrence for survivors of childhood cancer

研究代表者
益子　直紀（Mashiko, Naoki）

学校法人文京学院　文京学院大学・保健医療技術学部・准教授

研究者番号：５０５１２４９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，小児がん経験者（Childhood Cancer Survivors;以下，CCS)のposttraumatic growthの生起には，対人関係と病気の自己開示が重要であることが明らかになった．国内外の先行研究では，CCSによる病気の自己開示には様々な障壁があることが明らかにされている．病気の自己開示の難しさや他者との親密性を望むAdolescent and Young Adult世代 の特徴をふまえ「病気の開示に関わる対人関係満足度」に着眼して尺度開発を進めていくことが重要であると示唆された．今後は，新たな尺度の概念枠組みから，それに準じた質問項目を出していく計画である．

研究成果の学術的意義や社会的意義
成人期にある小児がん経験者（Childhood cancer survivors; 以下，CCS）を対象として，posttraumatic growth（以下，PTG）の構造をふまえてPTGの原因・誘因を明らかにできれば，実臨床から社会復帰後のCCSの自立支援に役立つ尺度が構築できる可能性がある．トラウマやストレスを体験した子どもたちが，経験をいかに心理的成長に役立てていけるかに着眼することは，CCSの心理的合併を社会的にサポートしていく上では大きな意義をもつ．

研究成果の概要（英文）：This study revealed that interpersonal relationships and disclosure of one's own illness are important factors for the occurrence of posttraumatic growth in survivors of childhood cancer. Previous studies in Japan and overseas have identified various barriers to disclosing one's own illness using Childhood Cancer Survivors. Results suggest that it is important to develop a scale focusing on "interpersonal relationship satisfaction regarding the disclosure of illness," while considering the difficulties of disclosing one's own illness and the nature of the adolescent and young adult generations who desire intimacy with others. The plan is to generate questions based on the conceptual framework of the new scale in the future.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児がん経験者　心理的合併症　PTG　成人移行期支援　尺度開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

子どもの生存率向上のために，小児がんへの対応は最重要課題であり，現在，先進国では急性リンパ性白血病の 10 年生存率が 90%以上と報告されるなど治療成績が向上している．しかし，小児がんの治癒には，成長発達が目覚ましい時期に強力な抗がん剤等の集学的治療を要するため，原疾患が治癒しても，身体的合併症・心理的合併症などの問題が起きている．これは，他の小児慢性疾患と異なる問題点で，長期フォローアップ（Long-term follow up；以下,LTFU)が必要になる．

心理的合併症を経験した小児がん経験者（Childhood cancer survivors; 以下，CCS）は，就職や結婚などのライフイベント時期に小児がん経験に関連したストレスに対する脆弱性が増加し，社会的自立を阻まれる特徴が指摘されている．この心理的合併症に対して，LTFU では外傷後ストレス症候の評価を行い，治療的介入が試みられている．しかし，わが国の現状として，受療ができるのは都心部や専門施設に限定的であること，20 歳を機にフォローアップを終え，すでに医療から離れている CCS も数多く存在することから，必要な時期に心理的晩期合併症への医療的支援が乏しい現状がある．

近年，心理的合併症からの回復への手がかりを得ようとする研究において，心的外傷後成長：Posttraumatic growth（以下,PTG）に注目が集まっている．PTG とは，危機的な出来事や，困難な人生の状況と闘った結果による，ポジティブな心理的変化であり，サバイバー自身で困難を乗り越えていく助けとなるとされている．PTG 理論の提起者らは，外傷的な体験や人生上の危機，及びそれに引き続く苦しみのなかから，心理的な成長が体験されることを示しており，PTG の生起には人の中核や信念を揺るがすような外傷がきっかけになるとしている（Tedeschi＆Calhoun, 2004）．先行研究では，CCS にも PTG が存在することや，心的外傷となった闘病体験を肯定的に捉え直すことで闘病に起因する PTSD が回復した事例が報告されている．これらの知見から，長期生存する CCS を対象として，PTG の構造をふまえて PTG の原因・誘因を明らかにできれば，実臨床から社会復帰後の自立支援に役立つ尺度が構築できると考えた．

２．研究の目的

本研究の目的は，小児期に外傷体験を負いながら成長した CCS の PTG 生起の構造に着眼し，CCS に感受性の高い PTG 尺度を開発することである．

３．研究の方法

【研究１】

１）小児がんに関わる心理的晩期合併症とともに生きる人の体験を明らかにする．

心理的合併症を抱えながら生きる CCS の長期的な経験や，長期予後を生きる CCS が小児がんに関わる心理的トラウマを克服しながら大人へと成長・発達していく過程については，まだ明らかにされていない．そのため，予備研究として，治療終了からおよそ 20 年経過した成人期にある CCS に対して，ライフストーリー・インタビューを行い，小児がんに関わる心理的合併症とともに生きるひとの長期的体験を記述・分析した．

【研究２】

１） CCS の PTG の構造をふまえて，PTG 生起に影響する要因を明らかにする．

対象者の一般属性・CCS として経験した出来事の聞き取り，および，日本語版外傷後の成長尺度 PTGI-J（Taku et al., 2007）による PTG の測定を行い，属性に関しては量的分析を加えた．PTG 測定値と属性は，記述統計量を算出した．まず，PTG の測定では，平均値と各因子得点平均値を算出した．次に，人口統計学的指標，ライフイベント等の経験，サバイバーの因子による PTG の比較分析を実施した．PTG 得点平均値と各因子得点平均値を算出して独立ｔ検定を行った．Shapiro-Wilk 検定により正規性が無いことを確認したものは，Mann-Whitney U 検定を行い，有意水準は 5%未満とした．

２）CCS による病気に関する自己開示の経験と，その心理的影響を明らかにする．

対象は，小児期（0～15 歳）にがんを発病し，最終治療終了から 5 年以上経過している 20 歳～40 歳までの CCS とした．研究は、定性的で記述的なデザインを使用した．

CCS に対するインタビューでは，インタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した．インタビュー調査の内容は，主に，小児期の闘病から現在までの体験とし，ライフイベントの経験，学校や社会生活での他者との関係，自己開示に関する経験，小児がんに対する気持ち・考えの変化を収集した．対象者の自由な語りを尊重し，詳しいデータが欲しい部分にはその都度質問を加えた．語りデータのコーディングには，コーディングと理論化のステップを明示した分析手法である SCAT（大谷，2019).を用いた．このコーディングで得られたストーリーライン・理論記述をもとに，主題分析を行い「自己開示できた経験とその心理的影響」を示すテーマを抽出した．そして，得られテーマから，自己開示できた経験と心理的影響を分析した．

研究１，研究２では，分析プロセス全体を通して，質的研究，量的看護研究の指導者による助言と確認をうけることで，データの信頼性を確保した．

４．研究成果

【研究１】

１）小児がんに関わる心理的合併症とともに生きるひとの体験

30 歳代の小児がん経験者 1 名を対象として，小児がん発病から 20 年以上にわたるライフストーリーを構築し，質的記述的に分析した．この研究で明らかになったのは，CCS が小児がん関連のトラウマ体験から回復し，心理的成長を知覚できた体験であった．

小児がん関連のトラウマ体験から回復して心理的に成長できた CCS は，長期間にわたり，小児がん体験によって失ったもの・得たものを深く考え反芻し，心的外傷後成長（PTG）ともいえる心理的変化を知覚することで，辛い病気体験が闘病後の人生を豊かにしたと意味づけていた．その後，小児期の病気にとらわれた思考を客観的に見つめ，メタ認知を活用して，心的症状を予測・回避していた．

【研究２】

１）CCS の属性と心的外傷後成長に影響する要因

研究参加者は，20 歳から 39 歳の 13 名で，小児がんと診断された年齢は平均 8.9 歳であり，PTG 平均値は 3.65 で 4 因子の平均値は全て 3.0（まあまあ経験した）以上であった．t-検定では，患者会への参加 1 項目だけが PTG の平均値に有意差を示し，患者会に参加したことのある人は，そうでない人に比べて PTG の平均値が高かった．自己開示前の CCS は特別視を強く懸念し，小児がんを秘匿して入院生活や退院後の生活を送っていたが，思春期から青年期になると全員が他者への病気説明や自己開示を経験していた．PTG 理論の提起者らは，意志をもって行われた自己開示に対する他者の支持的・非支持的反応がもたらす影響や，他社の反応によって反芻が生じるか否かを研究する必要性を論じている（Tedeschi & Calhoun, 2006 / 2014）．CCS は，患者会参加や友人への自己開示を経て，小児がんに関わるトラウマティックな出来事をどのように克服しているのか，また，どのようにポジティブな心理的変化を生じているのか，これらを明らかにすることが重要であると示唆された．

２）CCS の病気の自己開示経験と心理的影響

CCS の病気の自己開示経験と心理的影響として，定性データの分析より，3 つの概念「自己開示欲求の高まり」,「自分や他人の人生を豊かにした喜び」,「関係変化への期待感の高まりと失望感」と 8 つのテーマが抽出された（表１）．自己開示による心理的影響には，プラスとマイナスの両方があるが，危険を冒してまで自己開示を行うことは他者との親密な関係の発展や CCS の社会性を促進していた．自己開示の促進因子は，人間関係の自信につながる友人の承認と勇気づけであり，自己開示のポジティブな成果は，いずれも開示相手の肯定的な受け止めにより生じていた．

一方，ネガティブな成果としは，否定的な自己概念につながるフラストレーションの増大があり，開示相手の非支持的反応を得ることで生じていた．しかし，著しい自尊心の低下を報告した者は無く，開示相手の非支持的反応の原因を自己分析し，小児がん罹患により失ったもの・得たものを再度深く考え，闘病体験の価値や意味を見出す機会としていた．CCS にとって不成功に終わることもある病気の自己開示は，健康な他者との関係性を親密化させるために行う敢えてのチャレンジであり，それ自体が病気の克服体験であると示唆された．開示相手の非支持的反応により，CCS が自己開示のネガティブな成果「失望と慎重さ」を得たとしても，トラウマからの回復に向けた意図的熟考へつながる可能性が示唆された．

表１．テーマと概念

概念	テーマ
自己開示欲求の高まり	仲間と親密な関係を望む 心理的苦境にある人を助けたい 最悪の事態に備える
自分や他人の人生を豊かにした喜び	他者との関係における自信の獲得 自己有用感の増大 自分の経験価値の再認識
人間関係の変化への期待の増大と失望	関係変化への期待の増大 失望と慎重さ

本研究では，CCS の PTG 生起には，対人関係と病気の自己開示が重要であることが明らかになった．国内外の先行研究では，CCS による病気の自己開示には様々な障壁があることが明らかにされている．病気の自己開示の難しさや他者との親密性を望む Adolescent and Young Adult 世代 の特徴をふまえ，「病気の開示に関わる対人関係満足度」に着眼して尺度開発を進めていくことが重要であると示唆された．今後は，新たな尺度の概念枠組みから，それに準じた質問項目を出していく計画である．

引用文献

Calhoun, L. G. & Tedeschi, R. G (2006). Handbook of Posttraumatic Growth -Research and Practice / 宅香菜子，清水研（2014 訳)．心的外傷後成長ハンドブック．医学書院，東京．

大谷尚. (2019). 質的研究の考え方: 研究方法論から SCAT による分析まで. 名古屋大学出版会.

Taku, K., Calhoun, L. G., Tedeschi, R. G., Gil-Rivas, V., Kilmer, R. P., & Cann, A. (2007). Examining posttraumatic growth among Japanese university students. Anxiety, Stress, and Coping, 20(4), 353-367.

宅香菜子. (2010). 外傷後成長に関する研究: ストレス体験をきっかけとした青年の変容. 風間書房.

Tedeschi, R. G. & Calhoun, L. G. (2004). " Posttraumatic growth: conceptual foundations and empirical evidence". Psychological inquiry, 15(1), 1-18.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Mashiko, N., Sumiyoshi, T	４．巻 32(4)
２．論文標題 Factors affecting posttraumatic growth of childhood cancer survivors.	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Eubios Journal of Asian and International Bioethics.	６．最初と最後の頁 120-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Mashiko, N., Sumiyoshi, T	４．巻 14 (6)
２．論文標題 Self-Disclosure by Childhood Cancer Survivors and Its Psychological Effects.	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Global Journal of Health Science.	６．最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5539/gjhs.v14n6p57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 益子直紀，住吉智子	４．巻 18 (1)
２．論文標題 小児がんに関わる心理的晩期合併症とともに生きる人の体験　－傷つき体験から生まれた心理的成長－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 新潟大学保健学雑誌	６．最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 益子直紀、住吉智子
２．発表標題 AYA世代小児がん経験者のPTG（Posttraumatic growth）の手がかり　－開示に着眼して－
３．学会等名 第36回日本がん看護学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 益子直紀，住吉智子
２．発表標題 AYA世代小児がん経験者における外傷後成長（PTG）の特徴と看護への活用
３．学会等名 第34回日本がん看護学会学術集会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	住吉　智子 (Sumiyoshi Tomoko) (50293238)	新潟大学・医歯学系・教授 (13101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関